

学会報告奨励賞

プラトーフ『チェヴェンゲール』における
民衆ユートピア的要素

大友久子

作家アンドレイ・プラトーフはロシア革命によって生まれたと言っても過言ではない。金属工の息子で、生活のために幼い頃から働いていた彼に、革命は新たな世界を開いた。革命後の短い期間に彼は鉄道技術学校で学び、雑誌社で働き、講演をし、詩を書き、作家としての自己を生み出した。心から革命を支持し、科学による世界の変革を夢み、一時期共産黨員だったことさえある。

ところが、そんなプラトーフの小説『チェヴェンゲール』(1926-29)は、宗教的な雰囲気満ちている。この作品はロシア革命を背景としており、主な登場人物たちはみな共産黨員で、もちろん神を信じてはいない。にもかかわらず、彼らの行った大量虐殺は「キリストの再臨 *второе пришествие*」と名付けられる。革命委員会は教会へ移転され、スローガンとして「疲れた者、重荷を負う者は、誰でもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」(マタイ 11,28) というキリストの言葉が飾られる。

何より、登場人物たちの革命に対するイメージが黙示録的だ。聖書には「御名を畏れる者には、小さな者にも大きな者にも報いをお与えになり、地を滅ぼす者どもを滅ぼされる時が来ました」(ヨハネの黙示録 11,18) という一節がある。この来るべき報いの日と同じように、革命はアンチキリストであるブルジョアたちを滅ぼし、虐げられた者の手をとって起こしてくれる。そして楽園がやってくる。キリスト教においては、「キリストの再臨」後に現われる楽園が千年王国であるが、チェヴェンゲールの住人たちにとっては共産主義が千年王国なのである。

革命に対するこのイメージはロシア全土に共通するものであった。N. ベルジャーエフは、「ロシアの革命家、無政府主義者、社会主義者たちは無意識の千年王国論者であった。彼らは千年王国を待っていた」⁽¹⁾と言っている。革命と宗教は一見相反するもののように思われるが、この時代には両者は混在しており、『チェヴェンゲール』における共産主義と千年王国との類似性は、この

時代においては特異なことではなかった。ただ『チェヴェンゲール』には、キリスト教のうちでも国家教会に属さない人々、時の教会権力に追われる人々の思想との結びつきが顕著に感じられる。

千年王国の待望はキリスト教の根幹をなす思想のひとつであるが、教会権力の確立以降、それは同時に教会の敵でもあった。抑圧者と被抑圧者が逆転し、現時点で権勢を誇っている者たちが破滅するという千年王国は、体制側にとっては好ましからぬものである。だからこそ千年王国の到来を説いた人々は、ときに「異端」、ときに「セクト」と呼ばれ、時の教会権力から憎まれてきたのである。千年王国論そのものは異端ではないにしても、ファナティックな運動になりやすく、また「異端」「セクト」と呼ばれる説教者たちは「悔い改めよ、神の国は近づいた」と千年王国の到来を説くことを宣教の武器にしていた。

ロシアでは17世紀後半にニコンの改革に反対する古儀式派（分離派）が現れた。またそれとは別個に、сектанство と呼ばれる様々なセクトが発生した。去勢派、モロカン派、ドゥホボル派などがこれに当たる（сектанство の訳語としてこの論文では「セクト」を使用する）。⁽²⁾

現存する秩序を破壊して新たな世界を目指す、その新たな世界をユートピアと呼ぶならば、これら反・正教会の運動は、みなキリスト教を基盤としたロシア民衆によるユートピア思想の発現であった。

この論文では『チェヴェンゲール』を読みとく一つの鍵として、革命のイデオロギーに対して民衆の持っていた様々な理解の中から、古儀式派及びセクトとの関連を取り上げたい。小説『チェヴェンゲール』は主人公アレクサンドル・ドヴァノフが共産主義を探して遍歴する前半部と、人々がチェヴェンゲールの町にユートピアを作る後半部から成っている。全体を通してユートピアの問題が最大のテーマである作品を、ロシア民衆のユートピア思想の発現としてのキリスト教、いわゆる古儀式派及びセクトとの観点から見ることは、意義あることと思われる。

1. 地理的歴史的背景

まず、作者とセクトの関わりについて考えてみたい。プラトーフの生まれたヤムスカヤ村はザドンスク街道上に位置し、アトスへ向かう聖地巡礼者たちも、シベリアへ移住する農民たちも、通って行く場所であった。プラトーフは次のように書いている。

私が生まれたヤムスカヤ村はヴォロネジに隣接しており、編み垣と野菜畑とごぼうの生える荒れ地があった……。町家ではなく百姓家、靴職人、そしてザドンスクへの大きな道には、たくさんのたくさんの農夫たち。⁽³⁾

少年プラトーフはこの街道を見て育った。彼の重要なモチーフである放浪・遍歴はここに端を発するものであろう。またこの街道が「ヤムスカヤ村に救世主や楽園の地に関するおびただしい社会的ユートピア伝説をもたらした」とB. ワシリエフは書いている。⁽⁴⁾この街道がヤムスカヤ村やヴォロネジにもたらしたもののの中には、セクトの教義や風俗が含まれているはずである。というのも、このあたりの中央黒土地帯は最も古いセクトの中心地であったからだ。例えば、18世紀にドゥホボル派を設立者したイラリオン・ポビロヒンも、モロカン派の設立者セメン・ウクレインもタンボフ県出身である。その後の流布につれてその中心地はウクライナやコーカサス、シベリア、ザヴォルジエなどへ移っていったが、セクトの伝説はこの地に根強く残っていた。革命後ですら、「ここではセクトが巧みに『共産主義』や『民主主義』の仮面をつけ、労働者の職人、無資格階層を広く掌握している」ため、それとの戦いが呼びかけられたという記述が残っている。⁽⁵⁾

革命後、セクトはすたれるどころかむしろ著しく成長した。F. プチンツェフによれば、ヴォロネジ県におけるセクトの信者 *сектант* は1917年で1227名、1920年には2800名、1924年には6463名を数える。この数字だけでも増加の勢いは明かであるが、実際にはこの何倍もの人々がセクトであるとは明言せずに暮らしていたであろう。この増加の理由についてプチンツェフは、まず戦争や飢えの恐怖で宗教心が成長したと指摘し、「部分的に成長する宗教的雰囲気と、同時に起こった教会権威の失墜によって、住民の一部は無神論ではなく、他ならぬセクトに走った」と分析している。⁽⁶⁾

ロシアの農村は、集団化以降著しく変貌したが、集団化前には帝政時代と本質的には変わらない部分があった。特にその宗教的心性に変化がないことは上記の資料からも明かである。以上のことから、セクトやその影響を受けた中央黒土地帯の風俗を熟知していたプラトーフは、それらを自分の作品に取り入れたと思われる。

2. 作品における民衆ユートピア的要素

① 再洗礼

では実際に作品を見てみよう。まず、小説の前半部で主人公アレクサンドルが立ち寄るハンスキエ・ドヴォリキという村を例として取り上げる。アレクサンドルと、彼とともに旅するコピョンキンがハンスキエ・ドヴォリキに入ったとき、村にはある匂いが充満していた。密造酒を作っていたのである。全権委員は主張する。「今日は、帝政からの救済を記念する村の祈禱式だ。俺の人民には一日の自由意志が与えられた。今日は何をやってもいい。」(128) 革命は救い主であるから、感謝の祭儀を捧げるのだ。その後は無礼講である。

この革命委員会全権委員の名をフョードル・ドストエフスキーという。むろん、生まれた時に親からもらった名ではない。彼の改名の事情は次のように書かれている。

特別証明書において彼は、自分で自分をそのように再登録したのだ。証明書には、郷革命委員会全権委員イグナーチー・モションコフが、市民イグナーチー・モションコフの、有名な作家フョードル・ドストエフスキーを記念しての改名申告を受け、以下のように決議した旨が述べられていた。すなわち改名は翌日の始めから永久であること、以後、すべての市民にその呼び名を——彼らがそれに満足できるかどうかを——見直すよう提案すること、その際新しい名にふさわしいふるまいが不可欠であることを念頭に置くこと、である。フョードル・ドストエフスキーがこのキャンペーンを思いついたのは、市民の自己完成のためだった。リープクネヒトと名付けられた者は、彼のように生きていくのだ。さもなくば榮譽ある名は反対に没収すべし。この方式にのっとして改名登録簿に二人の市民が名をつらねた。スチエパン・チェチュエルはクリストファー・コロンブスに、井戸掘りのピョートル・グルジンはフランツ・メーリンクになった(129)。

こうしてイグナーチー・モションコフはフョードル・ドストエフスキーに改名した。この話はここで完結し、以後二度とこれについては語られない。作品中に数多く存在する、発展しないエピソードの一つで、印象的だがプロットに関係しない単発のエピソードとして読みとばしがちである。しかし、ここで、キリスト教文化圏において名を変えるということがどのような意味を持ちうるかを思い起こそう。革命前に生まれた彼がイグナーチーの名をもらったのは、当然のことながら、その名で洗礼を受けたからである。フョードルになったとき、彼はイグナーチーの名で受けた洗礼を否定したことになる。生まれた時の

洗礼を否定した彼は、名を変えたというより生まれ変わったのだ。

R.ガリツェヴァとI.ロドニャンスカヤによれば、『チェヴェンゲール』には「至るところに新たな、第二の誕生、新しい名による『洗礼』の考え方が存在する」。二人の研究者はハンスキエ・ドヴォリキの改名者達を *перекрещенцы* と呼んでいる。⁽⁷⁾

перекрещенцы ——再洗礼者たちと言うとき、ガリツェヴァとロドニャンスカヤが単なる改宗者を指しているのか、宗教改革前からドイツ、オランダ、イタリア、フランスなどに散在していた小団体のアナバプテストを考えているのか、あるいはロシアの古儀式派のうちの再洗礼主義者を指しているのか定かではないが、この時期ロシアで実際に再洗礼を行っていた人々を忘れるわけにはいかない。19世紀の60年代にロシアへ入ってきたバプテスト派である。幼児洗礼を認めず、新しい加入者に対して再洗礼を義務づけたバプテスト派は、世紀末から20世紀初頭にかけて急速に普及し、革命後もその伝道はソヴィエト全土に及んでいた。⁽⁸⁾

バプテスト派が広く受け入れられた背景には、農奴解放以前から流布していたドゥホボル派やモロカン派、農奴解放後に勢力を持ったシュトゥンダ派などの諸派の存在があった。これらのセクトは独自の共同体を作り、程度は様々だが、協同組合的な運営を行ったり、財産の私有を禁じたりと、いずれも共産主義的なユートピアを目指していた。そのため「共産主義的セクト」と呼ばれることもある。⁽⁹⁾同じ傾向を持つバプテスト派の布教はそれらを吸収するような形で行われた。

ソヴィエト政権は最初、これら共産主義的セクトに寛大だった。諸派の方でもそれを利用して。興味深いケースが報告されている。

共同体に入った反宗教宣伝者は、喜んで聞き入る聴衆を見いだしたものだ。彼らが去ると、しばしば司祭たちは村から追放され、正教会の建物はクラブに変わった。だが遅かれ早かれ巡歴の伝道者が、つまりバプテストかモロカンか、似たような信仰の者が救いのメッセージ、「真の福音」の説教とともにやって来た。そして二、三ヶ月後には、共産党の見地から全く安全に無神論化されたはずの共同体は、我々に馴染みの福音の賛歌のスラブ版を叫んでいるのであった。⁽¹⁰⁾

この場合、共産党の反宗教宣伝とセクトの宣教は同じ種類のものと受け取ら

れたであろう。従って革命委員会全権委員が帝政からの救済を記念して祈禱式を企画するような事態になるのである。『チェヴェンゲール』のこの一見笑い話のようなエピソードは、当時の社会状況に根ざすものと考えられる。

② 愛と結婚

作品の後半部で、登場人物たちは架空の町チェヴェンゲールに彼らのユートピアを築く。彼らはその町に「共産主義」を実現したと考えているが、彼らの「共産主義」とはどのようなものなのだろうか。共産党員のジェーエフは郡執行委員会議長チェプルヌイに「で、共産主義って何なんだい、同志チェプルヌイ？」と尋ねる。ジェーエフはそれを他の同志たちに聞いてみたのだが、誰一人ははっきりとは知らなかった。チェプルヌイは次のように答える。

プロレタリアートが自分たちだけで自由に暮らしていれば、共産主義はひとりでも出来てくる。何を知らたいってんだ、どういうこった、その場で感じて見つけなきゃならん時に！共産主義は大衆の相互的感情だ。じきにプロコフィーが貧しい者たちを連れて来る。そうすりゃ我々の共産主義も強化されて、すぐに分かるだろうさ…… (274)

黨員を相手にしているのでチェプルヌイは難しい言い方をしているが、一般市民向けには、もう少し易しい説明をする。ソヴィエト政権のシンボルである星の意味を尋ねられたとき、どうして十字や丸ではいけないのかという間に、チェプルヌイは、これは他の人間を抱こうとして両手両足を広げた人間だと説明する。

その他のものは、何ゆえ人間は抱き合わなければならないのかを知らなかった。[訳注：住人たちは「その他のものたち」と呼ばれている]そこでチェプルヌイは、それは人間のせいではなく、ただ人間の身体は抱き合うようにできているのだ、ということを明瞭に語った。でなければ手や足の行き場がない。「十字架も人間だよな」とその他のものは思い出した。「でも、なんで一本足なんだろう、人間は二本足なのに？」チェプルヌイはこれもすぐに気がついた。「昔、人間は手だけでお互いを支えようとしてたんだが、そのあと支えきれなくて、両足を広げて身構えたのさ。」 (311)

ここで明らかになるのは、チェプルヌイにとっての「共産主義」、彼の言う「大衆の相互的感情」とは互いを支え合うことであり、「隣人を自分のように愛しなさい」というキリストの教えと同じものだということだ。ソヴィエト政権のシンボルである星は、十字架をより抱擁に適するように発展させたものである。すなわち「共産主義」は、不完全だったキリスト教の完成された形なのである。

E. トルスタヤは『チェヴェングール』とロシアの鞭身派との類似を指摘している。「チェヴェングールに『同志愛』に基づくコンミュンをつくろうとする試みは、その本質において、人々を『天使』に変えようとする分派的、鞭身派的試みである。」⁽¹¹⁾ここでの指摘はこれだけで終わっているが、トルスタヤは他の論文でもチェヴェングールと鞭身派の類似を指摘している。⁽¹²⁾

鞭身派は17世紀末に起こった神秘主義的なセクトで、しばしば狂信的と評される。それは彼らの、聖霊を呼ぶ儀式のためである。歌いながら早いテンポで踊り、時にはわが身を紐や杖で打ち、宗教的エクスタシーへと達する。この儀式が強調されすぎて、鞭身派というと異常者の集団のように思われるかもしれないが、P. メーリニコフの紹介する彼らの十二の戒律を見ると、それが農民たちの素朴なキリスト教解釈であることが理解できる。

- 一、私は予言者たちの予言した神であり、人間の魂の救済のために地上に降臨した。私の他に神はない。
- 二、これの他に教えは存在しない。それを探してはならない。
- 三、置かれた所にとどまれ。
- 四、神の戒律を守り、世界の漁師になれ。
- 五、酒を飲んではならない。身体を犯してはならない。
- 六、結婚してはならない。妻のある者は妻と姉妹のように暮らせ。結婚していない者は結婚してはならない。結婚しようとしている者は別れよ。
- 七、下品な言葉や罵言を口にしてはならない。
- 八、婚礼や洗礼式に行ってはならない。宴席に出てはならない。
- 九、盗んではならない。一コペイカ盗んだ者はあの世でそのコペイカを頭の上に置かれ、それが地獄の火で燃え尽きた時に、初めてその者は許しを受けるであろう。
- 十、これらの戒律を秘密にせよ。父にも母にも明かしてはならない。鞭で打たれ、火で焼かれても、耐えよ。耐え抜くものは正しき者となり、

天の王国を受け、地上では心の喜びを受けるだろう。

十一、友と交わり、親しくもてなし、愛をなし、私の戒律を守れ。

十二、聖霊を信じよ。⁽¹³⁾

ちなみに、第十一で「親しくもてなし」と訳した部分の原文は“хлѣбъ-соль водите”で、パンに塩をそえて客をもてなす民衆の風習を反映している。また第九の、盗んだ一コペイカが頭の上で燃えるという罪と罰のイメージなどは非常に素朴である。教義の中に、もてなしや罰の民衆的具体的イメージと、第一、第二の戒律に見られる唯一神への絶対的信仰とが同居している。

第六、第七の戒律に見られる結婚の禁止は決してとっぴな思想ではない。聖書には「結婚できないように生まれついた者、人から結婚できないようにされた者もいるが、天の国のために結婚しない者もいる。これを受け入れることのできる人は受け入れなさい」(マタイ 19,12)とある。できれば独りであるのがよいが、情欲に身を焦がすよりは結婚しなさいというのが原始キリスト教以来の教えである。これを妥協なしに徹底すればもちろん、結婚の禁止に至る。

先にあげた諸派と同様、鞭身派も共同体を形成する。「船」と呼ばれる彼らの共同体の特徴として「鞭身派教徒たちどうしの関係が友情の、そして愛の性質さえ帯びている」⁽¹⁴⁾ことがあげられている。先に引用したトルスタヤの指摘はこの「船」のメンバーの関係、そして第六の戒律にある結婚の禁止を念頭に置いたものと思われる。

というのも、チェヴェンゲールには女の同志はいても妻はいなかったからである。チェプルヌイはコピョンキンに、「俺たちには妻なんていやしない。今じゃ女の同志がいるだけさ」(200)と語る。古い住人たちを虐殺したあと、新しい住人を募る際にも、同志になりそうな女だけを連れて来ること、でなければ追い返すことが言い聞かされる。「チェプルヌイはさし当たって、階級的愛撫だけを認めていたのであり、決して女性的愛撫を認めてはいなかった。」(261)

むろんそれは彼の理想でしかなく、チェヴェンゲールの新住人たちはやがて、妻をよこせと要求するようになる。それでも、チェヴェンゲールの町は妻のいない同志だけの町を目指していたのである。そしてその状態が保たれていた間は、確かに彼らにとってのユートピアが存在した。町には同志間の友情が発展し、「愛の性質」さえ帯びていた。彼らは一人の同志を自分の対象として選び、「思う」こと、すなわち贈物をしたり、相手の彫像を作ったりなどした。それ

が日常生活のすべてだった。

妻となるべき女性たちが連れて来られると、その友情は崩壊してしまう。女を得た者はもはや全体の集団には加わらず、特定の家を決めてそこからあまり出て来ないようになる。同志のために贈物をしないのかと聞かれて、ある者はこう答える。

共産主義が何だってんだ？今の俺にはグルーシャが同志さ。こいつのためにいくら働いても間に合わないよ。命をすりへらし過ぎて、食べ物を集めることもできないくらいだ…… (389)

「結婚」によってユートピアが崩壊する——『チェヴェンゲール』におけるこの性的要素の否定は、従来フョードロフの思想との関連が言われてきた。しかし、上にあげた第六の戒律のように、それは民衆の思考にその萌芽を認めることができる。ロシアの民衆がみな性のないユートピアを考えていたと言っているのではない。鞭身派にしても、戒律は戒律として、実際の儀式はともすれば乱交のようなものになりがちだった。ただ、この第六の戒律を生み出すような素地がもともと存在したはずであり、『チェヴェンゲール』におけるこうした考え方の起源はそこにもあると考えられる。

③ 聖霊

もうひとつ、チェヴェンゲールの責任者であるチェプルヌイの чувствовать「感じる」という言葉とそれに類似の表現について考えてみたい。「чувствовать」およびその類語を、チェプルヌイは実にしばしば口にする。以下その例をあげてみよう。

- Во мне сейчас струнулось одно талантливое чувство (207).
- Ты поласкай в алтаре Клавдюшу, а я дай предчувствием займусь, (212)
- У меня уж чувства уморились (214).
- Начинался тихий вечер, он походил на душевное сомнение Чепурного, на предчувствие, которое не способно истощиться мыслью и успокоиться (216).
- — У меня, товарищ Копенкин, то великое чувство в груди болит, а не в молодых местах (217).

- <...> а в будущее ведет, как говорилось в губернских циркулярах, ряд последовательно-наступательных переходных ступеней, в которых Чепурный *чувством* подозревал обман масс (227).
- — На основе ихнего же предрассудка! — постепенно формулировал Прокофий.
— *Чувствую!* — не понимая, собирался думать Чепурный (229).
- <...> и он (Чепурный. — Х. К.) ехидил для сосредоточенности в дальние луга, чтобы там, в живой траве и одиночестве, *предчувствовать* коммунизм (243).
- — Формулируй, Прош, — мирно сказал он (Чепурный. — Х. К.), — я что-то *чувствую* (243).
- Бурьян обложил весь Чевенгур тесной защитой от притаившихся пространств, в которых Чепурный *чувствовал* залегшее бесчеловечие (246).
- Чепурный хотел уходить отдыхать от своих *чувств*, но подождал человека, который шел издали в Чевенгур по пояс в бурьяне (246).
- И никто, даже Чепурный со своим слушающим *чувством*, не знал, что на некоторых дворах идет тихая беседа жителей (248).
- Ему хорошо было не спать и долго слышать формулировку своим *чувствам*, заглушенным их излишней силой; (248)
- Объективная же обстановка и тормоз мысли заключались для Прокофия в темном, но связном и безошибочном *чувстве* Чепурного (250).
- Чепурный смутно понимал и терпел в себе бушующие *чувства* (250).
- Чепурный мог *формлировать* свои *чувства* только благодаря воспоминаниям (254).
- <...> от живота до шеи он *чувствовал* в себе тогда какой-то сухой узкий ручей (255).
- Чего ты мне доказываешь, когда я сам *чувствую!* (260)
- Из таких *предчувствий* Чепурный готов был приветствовать в Чевенгуре всякую женщину, лицо которой омрачено грустью бедности и старостью труда (261).
- — Верно, — сказал он, и я то же *чувствовал*: (264)
- <...> *переживав* войну и революцию, не распухло до горла, Чепурный

оглянулся на покинутый Чевенгур (265).

・ Убеди меня, пожалуйста, — я ничего не чувствую! (339)

“чувство” “чувствовать” “предчувствие” ——これらはみなチェプルヌイの口癖である。彼には常にこれら言葉がつきまとっている。これらの表現が彼に頭の弱い夢遊病者のような印象を与え、彼を奇妙な人物にしている。しかし、チェプルヌイという一人の人物に与えられた「感じる」という特質を別の角度から見ると、彼が特殊な個人であるだけでなく、ある一つの傾向を代表していることが分かる。

再び鞭身派に戻ろう。このセクトの特徴として次の点が上げられている。「鞭身派教徒たちの宗教的世界観の基盤には人間と神との直接で神秘的な交わりへの信仰がある。その交わりは非常に緊密なもので、神と人間は一つの分かち難く等しい存在に融合し、一つの知性、一つの心、一つの意志を持つ。」⁽¹⁵⁾そこから、すべての書物を否定し、聖霊による啓示を絶対視する彼らの教義が生まれてくる。

チェプルヌイの「感じる」はこの鞭身派の特徴と非常に似通っている。

ブルジョア階級を葬ったあと、幸福のためにどう生きるべきか、最初チェプルヌイは見当もつかなかった。それで集中しようと遠くの草原へ去った。そこで、生きた草と孤独の中で、共産主義を予感するためである。まる二日間、草原の無人と反革命的な自然の慈悲の中に過ごした後、チェプルヌイは憂鬱になってふさぎ込み、カール・マルクスに知恵を求めた。分厚い本だから何でも書いてあるだろうと思ったのだ。彼は、世界がまばらにできている（ステップの方が家や人より多い）のに、世界と人々についてこんなにも考え出された言葉があるということに驚きさえした。

しかしながら彼はその本の読書を音読に組織した。プロコフィーが彼に読んで聞かせ、フェプルヌイは命を賭け、注意深い分別でそれを聞き、読み手の声が弱らないよう時々プロコフィーにクワスをついだ。読書のあとチェプルヌイは何も分からなかったが、気は楽になった。

「定式化しろ、プローシ。」穏やかに彼は言った。「俺は何か感じるから。」(243)

どうしたらいいのかわからなくなって、共産主義を予感するために草原へ去

るチェプルヌイは、もちろんわが身を鞭打つわけではない。だが根本にあるものは同じである。彼は共産主義との直接で神秘的な交わりを得るために草原へ出て行ったのだ。結局予感を得られず、チェプルヌイはカール・マルクスの分厚い本に頼ることにする。だがそこでも、本を音読するのはプロコフィーであり、彼は何かを чувствовать しようと努めている。あたかも共産主義の聖霊が降りて来るのを待つかのように。

住人たちは何に従事しているのかというコピョンキンの問に、チェプルヌイは答える。「人間の魂だ。それが基本的職業さ。で、その生産物が、友情と同志愛だ！」(221)チェプルヌイの、もしくは作者プラトーフのうわごとに見えるこの言葉は、鞭身派の教義の翻訳とも思える。チェプルヌイの「感じる」という言葉には鞭身派の聖霊信仰に通じるものがある。

と言っても、『チェヴェンゲール』は鞭身派の思想を描いていると言いたいのではない。ただ主人公たちが共産主義を考えると、その思考パターンはロシアに何世紀も培われてきたユートピア観に従っており、そのユートピア観を最も顕著に表わしているのがこれらキリスト教のセクトなのである。

結論にかえて

『チェヴェンゲール』における「共産主義」は、「良き人々のつどい общество хороших людей」(130)という意味を持っている。主人公アレクサンドルは全権委員ドストエフスキーにこの傾向を見抜き、彼に組織と施設の重要性を教えようとする。だがそのアレクサンドルにしても、組織と施設よりも「良き人々のつどい」を重要視することには変わりはない。だからコピョンキンが、チェヴェンゲールにあるのは共産主義か否かと聞いたとき、彼は即座に共産主義だと答えるのである。登場人物たちは、「良き人々のつどい」という伝統的な理想郷像を「共産主義」という言葉に当てはめている。それは鞭身派に見られるように、キリスト教の一要素である隣人愛がロシア的に展開した形といえる。

『チェヴェンゲール』はソヴィエト共産党のパロディーと言われる。また作者プラトーフの独自の哲学の展開とも言われる。いずれの見解にも異論を唱えるつもりはない。ただ非常に風変りで奇妙に思えるこの作品は、決して単なる空想物語ではなく、個々の点にはそれぞれの根拠と歴史的背景が存在することを忘れてはならない。

『チェヴェンゲール』からの引用は Платонов А. *Чевенгур*. М., Высшая школа, 1991 により, () 内にその頁数を示した。日本語訳は筆者による。

- 注(1) Бердяев Н. *Русская идея*. Paris, YMCA-PRESS, 1972, с.202.
- (2) сектантство をどのように定義するかは様々な考え方があがあるが, この論文では *Критика религиозного сектантства: (Опыт изучения религиозного сектантства в 20-х — начале 30-х годов)*. М., Мысль, 1974. に従い, 同書巻末の Словарь религиозных сект に名を挙げられているものを сектантство とする。ただし, 同書にもその一部が転載されている Никольский Н. М. *История русской церкви*. 3-е изд., М., Политиздат, 1983. では古儀式派の бегунство も сектантство 中に含まれている。
- (3) Платонов А. П. *Государственный житель: Проза, письма*. М., Советский писатель, 1988, с.549.
- (4) Васильев В. В. *Андрей Платонов: Очерк жизни и творчества*. 2-е изд., М., Современник, 1990, с.6.
- (5) Путинцев Ф. Районы распространения сектантства прежде и теперь. — в кн.: *Критика религиозного сектантства*, с.87
- (6) Путинцев Ф. Современное сектантство. — в кн.: *Критика религиозного сектантства*, с.57
- (7) Гальцева Р., Роднянская И. "Помеха-человек," *Новый мир*, 1988, №12, с.222.
- (8) См.: *Христианство: Словарь*. М., Республика, 1944.
- (9) См.: Никольский Н. М. *История русской церкви*, с. 317; Hecker J. *Religion Under the Soviets*. N. Y., Vanguard Press, 1927, p.156
- (10) Hecker J. *Religion Under the Soviets*, p.153.
- (11) Толстая-Сегал Е. "Натурфилософские темы Платонова," *Slavica Hierosolymitana*, Jerusalem, 1978, v.2, с.247
- (12) См.: Толстая-Сегал Е. "Идеологические контексты Платонова," *Russian Literature*, Amsterdam, 1981, IX, p.259.
- (13) Мельников П. И. *Полн, Собр. Соч.* Изд.2-е., СПб., т.5., Издание Т-ва А. Ф. Марксъ, 1909, с.271—272.
- (14) Кутеповъ К. *Секты хлыстовъ и скопцовъ*. Казань, Типографія Императорскаго Университета, 1882, с.326. См. также: Плотниковъ К. (сост.) *Исторія и обличеніе русскаго сектантства (мистическаго и раціоналистическаго)*. Изд.3-е., Петроградъ, 1916, Типографія И. В. Леонтьева, с.27.
- (15) Плотниковъ К. (сост.) *Исторія и обличеніе русскаго сектантства*, с.56.

Мотивы народной утопии в «Чевенгуре» А. Платонова

Хисако ОТОМО

Можно сказать, что Андрей Платонов — писатель, рожденный революцией. Однако его роман «Чевенгур» (1926—29) наполнен религиозной атмосферой. В ней перекликается своеобразное понимание коммунизма героями с мировоззрением верующих, притесняемых церковной властью. Если назвать утопией мечту установить новый, идеальный мир, то все антиправославные действия, направленные на разрушение старого, действующего церковного порядка, — не что иное, как воплощение утопических идей русского народа. Кажется, поэтому в «Чевенгуре» немало встречается мотивов народной утопии.

Что касается исторического и географического факторов, необходимо отметить, что родина Платонова — Черноземье — являлась самым старым центром сектантства, традиции которого сохранялись там даже после революции.

В каких же деталях и эпизодах «Чевенгура» отразился жизненный опыт Платонова? Приведем некоторые примеры:

1. Переименование жителей Ханских Двориков в романе можно сравнить с «новым крещением», производимым в баптистской секте. Согласно учению баптизма, который не признает крещение младенцев, верующие принимают крещение в сознательном возрасте. Идеи баптизма быстро распространялись по всей России с конца 19 века, и даже после 1917 г. — несмотря на притеснения со стороны советской власти.
2. У героев романа своеобразное восприятие коммунизма: коммунизм для них — совершенная форма несовершенного христианства, которому недоставало «сплошного» товарищества и братства. В Чевенгуре они материализовали свою мечту, отменив института брака. Но введением жен в город они сами же разрушили свою утопию. Если проводить аналогию этого эпизода с традицией сектантства, то, например, у хлыстов браки были запрещены. Обычно тему «разрушение утопии в результате введения института брака» относят к идеям Н. Федорова, но ее можно отнести и к учению сектантства.
3. Чепурный, один из главных героев романа, часто употребляет слова «чувствовать» «предчувствовать», «чувство» с особым оттенком. Эти слова отражают его веру в таинство непосредственного общения с коммунизмом. Вполне возможно предположить, что его идея происходит от веры хлыстов в Дух Святой.

Конечно, нельзя утверждать, что Платонов был выразителем идей сектантства. Но когда герои романа размышляют о коммунизме, их мышление отражает идеи народной утопии, самый яркий пример которой — сектантство в России.